

シリーズ・いま、世界の子どもの本は？

第3回

第一部 韓国の子どもの本の現在 (要旨)

平成23年1月22日

講師：大竹聖美

はじめに

こんにちは。大竹です。よろしくお願いたします。

- 『マンヒのいえ』(クォン・ユンドク絵と文、セーラー出版、1998年)
- 『しろいはうさぎ』(クォン・ユンドク文・絵、福音館書店、2007年)
これらは今日お話くださるクォン・ユンドクさんの作品です。
- 『韓国のお正月』(イ・サンヒ作、ホン・ソンジュ絵、岩崎書店、2010年)
- 『十長生をたずねて』(チェ・ヒャンラン作・絵、岩崎書店、2010年)
- 『シルム：韓国のすもう』(キム・ジャンソン作、イ・スンヒョン絵、岩崎書店、2011年)

これらは今一番ホットな韓国の絵本で、岩崎書店の韓国文化のシリーズです。

韓国の絵本というと、私はまず以下の4冊を紹介します。

- 『山になった巨人：白頭山ものがたり』(リュウ・チェスウ作・絵、福音館書店、1990年)
1988年、ソウル・オリンピックの年に韓国の単行本の絵本として初めて出て、韓国の絵本を拓いた作品とされています。
- 『くらやみのくにからきたサブサリ』(チョン・スンガク絵・文、アトーン、2004年)
1994年出版。ここからが本格的な韓国絵本のスタートで、次のような絵本が出ました。
- 『ソリちゃんのチュソク』(イ・オクベ絵と文、セーラー出版、2000年)
- 『マンヒのいえ』(既出)

韓国の絵本を拓いたリュウ・チェスウ

リュウ・チェスウさんは、1984年に日本でアジアの出版関係者を支援するユネスコ・アジア日本センター主催のワークショップに参加して講師の田島征三さんに影響を受け、絵本を描き始めました。絵本作家ですが、南北の統一と子どもたちの未来のための平和を願う活動家でもあります。

- 『きいろいかさ』（リュウ・チェスウ作・絵、メディアリンクスジャパン、2010年）
文字のない絵本。2002年にニューヨーク・タイムズ最優秀絵本賞を取り、韓国の絵本が世界的に非常に有名になりました。

韓国の絵本が本格的に動き出した！（1994～95年）

韓国の絵本が本格的に動き出したのは1995年だと考えています。『くらやみのくじからきたサブサリ』、『ソリちゃんのチュソク』、『マンヒのいえ』、ジョン・ユジョンさんの韓国の料理の絵本（未邦訳）の4冊がほぼ同時に出ました。興味深いことに、企画編集は全てシン・ギョンスクさん（韓国初の絵本専門店「チョバン」を作った方）、アートディレクションはイ・ホベクさん、ブックデザインは何と全てクオン・ユンドクさんでした。

これらの方々の生年は、イ・ホベク（1960～）、クオン・ユンドク（1960～）、ジョン・ユジョン（1960～）、ジョン・スンガク（1961～）と皆さん1960年、1961年生まれで、これはとても重要な意味を持ちます。1960年生まれということは、1980年には20歳で大学生です。1980年は韓国にとって大変重要な年、つまり光州事件が起きた年です。このとき大学生だった人は学生運動をしていました。民主化運動をした方々の作品だというのは重要だと思います。

韓国・初 2004年ボローニャ国際児童図書展ラガッツィ賞（ノンフィクション部門）入選

シン・ギョンスクさんは今ではチョバンチェックバンという出版社も持ち、ボローニャ国際児童図書展でラガッツィ賞を取るような作品を生み出しています。御主人の留学についてアメリカに行き、そこでの子育て中に絵本に目覚めたそうです。

- 『水宮歌（スグンガ）：こどもパンソリ絵本』（イ・ヒョンスン文、イ・ユッナム絵、アートン、2004年）
- 『あかいはなさいた』（タク・ヘジョン文・絵、岩波書店、2008年）
これらは邦訳されています（チョバンチェックバン出版、シン・ギョンスク企画編集）。

邦訳されている<チェミマジュ>の絵本（イ・ホベク企画編集）

- 『きいろいかさ』（既出）
- 『せかいいちつよいおんどり』（イ・ホベクさく、イ・オクベえ、新世研、2001年）
- 『うさぎのおるすばん』（イ・ホベク作、黒田福美訳、平凡社、2003年）
- 『なかよしむら』（ホン・ソンチャンさく・え、新世研、2001年）

これらはチェミマジュ社のイ・ホベクさんが企画・編集した絵本です。2002年に『きいろいかさ』、2003年に『うさぎのおるすばん』と、2年連続してニューヨーク・タイムズ最優秀絵本賞を受賞し、この頃一番世界的に注目されました。

イ・ホベクさんは留学したフランスでお子さんが生まれ、フランス人の友人から絵本をた

くさんもらい、絵本に目覚めました。80年代後半頃に外国にいち早く留学した方々が90年代初めに戻り、今の韓国の元気のよい文化を作りました。

サゲジヨル社「韓国の文化」シリーズ

韓国の昔話絵本や韓国の文化を伝える絵本が優れていることが韓国の絵本の特徴です。大体どの出版社も「韓国の文化」シリーズを出しています。裏返すと、海外の翻訳絵本がたくさん入ってくるので、反動として自分たち固有のものを作ろうという意気込みで作られています。

- 『ソルビム：お正月の晴れ着』（ペ・ヒョンジュ絵・文、セーラー出版、2007年）
 - 『ソルビム：お正月の晴れ着2（男の子編）』（ペ・ヒョンジュ絵・文、セーラー出版、2007年）
 - 『シルム：韓国のすもう』（既出）
- こちらの3冊は邦訳されています。

セーラー出版の韓国の絵本 韓国の風習／衣・食・住

日本のセーラー出版は韓国の文化、伝統、風習の絵本を多く出し、衣食住がそろっています。

- 『ソリちゃんのチュソク』（既出）【伝統】
- 『マンヒのいえ』（既出）【住】
- 『ソルビム：お正月の晴れ着』（既出）
- 『ソルビム：お正月の晴れ着2（男の子編）』（既出）【衣】
- 『きょうはソンミのうちでキムチをつけるひ！』（チェ・インソン文、パン・ジョンファ絵、セーラー出版、2005年）【食】

アートン社「韓国の絵本10選」

アートン社は2004年に「韓国の絵本10選」を出しました。

- 『うしとトッケビ』（イ・サン文、ハン・ビョンホ絵、アートン、2004年）
- 『ふしぎなかけじく』（イ・ヨンギョン絵・文、アートン、2004年）
- 『へちとかいぶつ』（チョン・ハソプ文、ハン・ビョンホ絵、アートン、2004年）
- 『くらやみのくにからきたサブサリ』（チョン・スンガク絵・文、アートン、2004年）
- 『蚊とうし』（ヒョン・ドンヨム文、イ・オクベ絵、アートン、2004年）
- 『あかいきしゃ：はじめてであうハングルの絵本』（パク・ウニョン絵・文、アートン、2004年）
- 『パパといっしょに』（イ・サンクオン文、ハン・ビョンホ絵、アートン、2004年）
- 『わたしの社稷洞（サジクドン）』（キム・イネ文、ハン・ソンオク絵、アートン、2004年）
- 『あずきがゆばあさんとトラ』（チョ・ホサン文、ユン・ミスク絵、アートン、2004年）

年)

- 『水宮歌 (スグンガ) : こどもパンソリ絵本』 (イ・ヒョンスン文、イ・ユッナム絵、アートン、2004年)

平凡社<韓国の四季の絵本>シリーズ

平凡社の「韓国の四季の絵本」シリーズも重要です。絵を描いたイ・テスさんは大変人気のある細密画の画家です。文章を書いたユン・クビョンさんは、大学の哲学の教授を辞め、自然との共生を哲学とした自給自足の共同体を運営しています。

韓国の絵本には、自分たちの固有の文化や昔話を子どもに伝えるという特徴があります。また、韓国の絵本作家や出版社、編集者には、自然との共生の意識や一極集中した都市生活に対する疑問、社会の矛盾点を告発する意識を持つ方が非常に多いです。

- 『スニちゃん、どこゆくの』 (ユン・クビョン文、イ・テス絵、平凡社、2003年) (韓国の四季の絵本 ; 春)
- 『つまんなくってさ』 (ユン・クビョン文、イ・テス絵、平凡社、2003年) (韓国の四季の絵本 ; 夏)
- 『おおいそがし、こいそがし』 (ユン・クビョン文、イ・テス絵、平凡社、2003年) (韓国の四季の絵本 ; 秋)
- 『さいごにのこるの、だあれだ』 (ユン・クビョン文、イ・テス絵、平凡社、2003年) (韓国の四季の絵本 ; 冬)

キム・ジェホン (1958~)

キム・ジェホンさんは、自然との共生や貧しさについて、問題意識を持って果敢に描いています。

- 『かわべのトンイとスニ』 (キム・ジェホン作、小学館、2007年)
- 『ヨンイのビニールがさ』 (ユン・ドンジェ作、キム・ジェホン絵、岩崎書店、2006年)
『ヨンイのビニールがさ』には、物乞いをするおじいさんが出てきます。

韓国で刊行されている田島征三作品

田島征三さんの絵本はたくさん韓国語に翻訳されています。田島さんの絵本が人気なのは、自然との共生生活への志向や社会に対して発言するスタイルが韓国の出版界と共通するからだと思います。

- 『やぎのしずか. 1-2』 (田島征三著、文化出版局、1975年)
昨年、『やぎのしずか』の韓国語版が出ました。とても人気です。
- 『とべバッタ』 (田島征三作、偕成社、1988年)
『とべバッタ』はいち早く韓国に紹介され、チョン・スンガクさんはこの本に触発されたそうです。2006年に大阪国際児童文学館で開催されたシンポジウム「韓国と日本の絵本」で、チョン・スンガクさんと田島征三さんは対談なさいました。

チョン・スンガク作品

- 『くらやみのくにからきたサブサリ』(既出)

チョン・スンガクさんの児童文学作品。

以下の3冊は、韓国の代表的な童話作家クォン・ジョンセンさんの作品を絵本化したもので、全てロングセラーです。

- 『こいぬのうんち』(クォン・ジョンセン文、チョン・スンガク絵、平凡社、2002年)
- 『あなぐまさんちのはなばたけ』(クォン・ジョンセン文、チョン・スンガク絵、平凡社、2001年)
- 『黄牛のおくりもの』(クォン・ジョンセン作、チョン・スンガク絵、いのちのこぼ社フォレストブックス、2003年)

韓国の代表的童話作家 クォン・ジョンセン (1937~2007)

- 『モンシル姉さん』(権正生著、てらいんく、2000年)
- 『わら屋根のある村』(権正生著、てらいんく、1998年)
- 『悲しい下駄』(クォン・ジョンセン作、岩崎書店、2005年)

これらの作品は、全て戦争に関連しています。『モンシル姉さん』や『わら屋根のある村』は朝鮮戦争を背景とする作品です。

イ・オドク (1925~2003)

重要な人物としてイ・オドクさんがいます。『わたしたちのアジア・太平洋戦争. 1~3』(古田足日、米田佐代子、西山利佳編、童心社、2004年)にも「戦時中の植民地下の暮らし」という文章を書きました。代表的な児童文学評論家で、日本の「生活綴り方運動」と似た活動をしました。ポイントは、韓国の子どもの現実的な目で書くという児童文学観です。カリスマ的な存在で、韓国の教育界、作家、児童書出版関係者に多大な影響を与えました。

韓国の児童文学

日本に紹介されている韓国の児童文学作品は、絵本に比べて格段に少ないです。戦争の被害や戦争の記憶、貧しさ、阻害された者たちが描かれています。

- 『ねこぐち村のこどもたち』(金重美著、廣済堂出版、2002年)
韓国でベストセラーになった作品。
- 『世界でいちばん大切な思い』(イ・ミエ文・構成、東洋経済新報社、2003年)
実話ばかり集めた短編の童話で、短編アニメとなり、テレビで非常に人気を博しました。
- 『庭を出ためんどり』(ファン・ソンミ文、キム・ファンヨン絵、平凡社、2003年)
ファン・ソンミさんは、クォン・ジョンセンさんに次ぐ注目の女性作家です。

- 『だまされたトッケビ：韓国の昔話』（神谷丹路編訳、福音館書店、2006年）
トッケビが出てくる昔話ばかりを集めた昔話集。

現文メディア「韓国人気童話シリーズ」

現文メディア社の「韓国人気童話シリーズ」は、日韓の子どもたちが小さい頃から隣国の子どもが読んでいる本を読めば本当の文化交流になるという志で、韓国の子どもたちがよく読んでいるベストセラーや受賞作品ばかりを出版しています。このシリーズから課題図書を選び、昨年（2010年）から駐日韓国大使館の韓国文化院が読書感想文コンクールを主催しています。そのような形で日韓交流、文化理解が子どもたちから始まっていけばと思います。

韓国の児童文学作家は学校の先生が多いです。読むと韓国の子どもの現実の生活がよく分かります。韓国では社会から阻害された子どもたちの側に立つという教育観があります。例えば次のような作品があります。

- 『ぼくのすてきなお兄ちゃん』（コ・ジョンウク文、ソン・ジンホン絵、現文メディア、2008）
障害を持つお兄さんの話。
- 『星と話す少年』（ペ・イクチョン文、チェ・チョルミン絵、現文メディア、2008年）
重病で入院している子どもの話。
- 『北からやって来た女の子』（ウォン・ユスン文、チェ・ジョンイン絵、現文メディア、2008年）
脱北者の話。
- 『世界で一番小さいもうと』（コ・スザンナ文、イ・ジンウ絵、現文メディア、2008年）
超未熟児の妹の話。
- 『成績が上がる魔法のチョコ』
韓国の過酷な学歴社会でストレスを受け、アイデンティティーを見失う子どもの様子が描かれています。

韓国の詩の絵本シリーズ

ゴ・ソナさんが企画編集した「詩の絵本」シリーズがあります。韓国は詩の国で、一篇の詩が一冊の絵本になります。

- 『ヨンイのビニールがさ』（既出）
- 『よじはん よじはん』（ユン・ソクチュンぶん、イ・ヨンギョンえ、福音館書店、2007年）
- 『ことりはことりは木でねんね：韓国のこもりうた』（チョン・スニ作、童心社、2007年）
これは子守歌です。

若手絵本作家（30～40 歳代）

クオン・ユンドクさんやイ・ホベクさんは 50 代になる方々ですが、韓国では次々と若手作家が出てきています。『十長生をたずねて』の作家チェ・ヒャンランさんは 40 歳くらいです。チェ・ミランさん（1975～）の作品はまだ一冊も邦訳されていませんが、百済の香炉や新羅の仏像などの文化を絵本にしています。オ・ジョンテクさんはデザイナー出身の男性作家で、たくさんの作品があります。デザイン科出身で、アパレルデザインなどの経験者が絵本に進出しているというのが、若手作家の一つの傾向です。

韓国の書店

韓国最大の書店、教保文庫（キョボムンゴ）は、光化門（カンファムン）の中心にあります。とても広くて、子どもたちが座って熱心に絵本を眺めています。アンソニー・ブラウンの『おんぶはこりごり』は人気の絵本です。もう一つ、ロッテホテルの斜め前にブックス・リブロ(BOOKS LIBRO)があります。

日・中・韓平和絵本

日・中・韓平和絵本は、最初、日本の作家の田島征三さん、田畑精一さん、浜田桂子さん、和歌山静子さんの 4 人の方々の呼びかけで始まりました。そして、チョン・スンガクさんが 2006 年に講演で来日されたときにその話をされ、日本の作家の方々や私とその夏ソウルに行くことになりました。そこで迎えてくださったのがチョン・スンガクさんやクオン・ユンドクさん、イ・オクベさんでした。

このような作家たちの熱い思いでスタートした日・中・韓平和絵本は、日中韓それぞれ 4 名ずつの作家が参加して一人 1 冊ずつ、合計 12 冊の作品が出ます。日本では童心社から出ます。まず 4 月 1 日に以下の日中韓の絵本が同時に出版されます。

- 『へいわってどんなこと？』（浜田桂子作、童心社、2011 年）
- 『非武装地帯に春がくると』（イ・オクベ 文・絵、童心社、2011 年）
- 『京劇がきえた日』（ヤオ・ホン 文・絵、童心社、2011 年）

私の話はこのくらいにして、クオン・ユンドクさんに替わりたいと思います。どうもありがとうございました。